

氏 名 牧野 由佳

学位(専攻分野) 博士(文学)

学位記番号 総研大甲第 2635 号

学位授与の日付 2026 年 3 月 24 日

学位授与の要件 文化科学研究科 日本歴史研究専攻
学位規則第6条第1項該当

学位論文題目 梯子獅子の民俗学的研究
—愛知県知多・朝倉の梯子獅子の変容に注目して—

論文審査委員 主 査 松田 睦彦
日本歴史研究コース 教授
松尾 恒一
日本歴史研究コース 教授
内田 順子
日本歴史研究コース 教授
白川 琢磨
福岡大学 名誉教授
久保田 裕道
国立文化財機構東京文化財研究所
無形民俗文化財研究室長

博士論文の要旨

氏 名： 牧野 由佳

論文題目：梯子獅子の民俗学的研究

—愛知県知多・朝倉の梯子獅子の変容に注目して—

本研究は、日本に伝承される獅子舞の一種である「梯子獅子」（獅子に扮した二人一組の演者が梯子に登り、高所で舞を演じる民俗芸能）を対象として、次の二点の解明を目的とするものである。

第一に、民俗芸能の担い手たちが有する伝承の変容過程の実態と特質を明らかにすることである。特に、その変容が地域内外の社会情勢とどのような関係を持つのかに注目し、伝承組織と組織を構成する個人との関係性の動態にも焦点を当てることによって、民俗芸能の変容および継承を多面的に分析する。第二に、梯子獅子における舞台装置（梯子・ヤグラ）の信仰的意義を明らかにすることである。折口信夫以来の棧敷論・ヤグラ論を、民俗芸能の実践から再考する。

従来の民俗学では、伝承母体論に代表されるように、伝承の担い手を地域共同体や家族親族といった集団の枠組みの中で捉える視点が主流であった。しかし近年では、民俗としての伝承に注目するあまり、実在する人間への関心が希薄であったという批判がなされている。

民俗芸能研究においても、多くの研究者によって「個」への注目が深められてきた。しかしながら、その多くは特異な技能や熱意を持つ「キーパーソン」にのみ注目した研究で、民俗芸能に参加する「その他大勢」の担い手は周縁化・同質化されてきた。本研究では、特定のキーパーソンのみならず、その周囲にいる多様な担い手への聞き取り調査を通じて、伝承の変容と「個」との関係性を論じた。

研究方法は、フィールドワークと歴史資料の検討を主とした。第一の課題については、愛知県知多市朝倉集落に伝承される梯子獅子を事例とし、平成 25（2013）年から令和 7（2025）年までの 10 年以上にわたり現地調査を実施した。本梯子獅子は、朝倉の氏神社である牟山神社例祭にて毎年 10 月に奉納される民俗芸能である。調査においては、担い手組織内の多様な立場・世代 60 人超に対して聞き取り調査と参与観察、牟山神社所蔵の歴史資料調査などを行なった。第二の課題については、日本列島に伝承される梯子獅子の担い手たちの舞台装置に対する認識と扱い方を比較検討を行うことにより分析した。

本論文は、序章・本論 10 章・終章の構成をとる。

序章では、梯子獅子の概要をまとめるとともに、民俗学・民俗芸能研究における集団と「個」の関係性に関する研究史、梯子獅子の研究史を整理し、それを踏まえた本研究における課題を提示した。

第 1・第 2 章は、広域的な視点により、従来の研究では明らかにされてこなかった日本列島における梯子獅子の分布と伝承地の特徴を考察した。

第 1 章では、全国調査により、梯子獅子が令和元年時点で 33 か所に現存し、過去の伝承地が少なくとも 25 か所あることを明らかにした。また、分布地の地理的特徴を分析した結果、太平洋側や瀬戸内海側に集中し日本海側には認められないこと、基本的に沿岸部またはその隣接地域に伝承されること、広く点在するのではなく複数の圏域に集中することなどを明らかにした。

第 2 章では、梯子獅子の梯子の形態の地域差を明らかにした。また、遠隔地間の伝播関係について検討し、伝承地の分布から、近世期の廻船活動や漁民の広域的活動など、江戸時代の海上活動が背景にある可能性を論じた。

第 3 から第 8 章では、朝倉の梯子獅子を事例とし、伝承組織の多様な立場・世代の担い手 60 人超への聞き取り調査を通じて、組織と「個」の関係性に焦点を当てながら、地域社会とそのかわりの

中での歴史的変化を検討した。第3章は、次章以降の前提として、朝倉集落の概況と、朝倉の梯子獅子が奉納される牟山神社例祭の実態を参与観察に基づき詳述した。

第4章は、梯子獅子の担い手である青年組織の変容に焦点を当てた。朝倉では、昭和中期に従来の伝承組織である青年団が解散したが、年齢や性別に関する条件はその後も維持されてきた。現在も少子化などの影響を受けつつも、数え16歳から24歳まで男性で構成される朝倉青年会が演者として中心的な活動を行なっている。しかし実際には、青年会を引退した先輩で構成する朝倉梯子獅子同好会が青年会と深いかかわりを持っている。同好会は昭和40年代に発足した当初は指導・補助役であったが、青年会員の減少にともない主要な担い手へと役割を拡大し、両組織が実質的に一体化することになった。梯子獅子の担い手の組織構成は社会情勢の影響を受けつつ再編成されてきた。この組織変容により、参加の動機や芸能への関わり方にも多様性が生じた。

第5章は、朝倉の梯子獅子の起源伝承に焦点を当てて検討した。聞き取り調査により、現在広く知られる起源伝承は世代間で認識に隔たりがあることが判明した。その要因を解明するために、昭和20年代から50年代の文字媒体（自治体史、週刊誌、パンフレット等）を比較検証し、複数あった伝承が、一つに統一・固定化される過程を明らかにした。この統一化には、昭和45（1970）年に発行された文化財資料集が大きな役割を果たした。本資料は、自治体発行という公的性格と公立図書館に蔵書されたことによるアクセスの容易さにより、信頼性と持続的な波及力を獲得したことで強い影響力を持ったことを指摘した。

第6章は、住民の生業と神社例祭の関係を検討した。現在の伝承では、牟山神社例祭で奉納される梯子獅子は、秋の収穫感謝のために始められたとされている。しかし実際には、歴史資料により、現在のように10月に行なわれるようになったのは大正期以降であることを明らかにした。祭日変更の要因は、近代に地域の生業として拡大した養蚕業の繁忙期（9月）を避けるためであった。この祭日変更が、梯子獅子の意味解釈の変化と新たな起源伝承の創出につながったことを指摘した。

第7章では、昭和28年に行なわれた伊勢神宮式年遷宮を記念した奉祝行事における朝倉の梯子獅子の奉納と、それにともない神宮から拝領した古材を用いた牟山神社拝殿が再建されるまでの過程を民俗調査と歴史資料により明らかにした。こうした神宮との関係構築によって、朝倉において、神宮に対する強い崇敬の念が芽生えていった。ただし、この経験に対する受け止め方は世代や個人によって差異が見られ、特別な機会として誇りを持つ者もいれば、それほど重視しない者もいるなど、担い手個人々の認識は多様であった。

第8章では、組織と「個」の関係性という視点から、担い手たちの信仰に関わる伝承の変容を検討した。世代によって習俗やタブーの認識に差異が見られることを指摘し、新たな動機付けや再解釈がされながらも慣習は継続されていることを明らかにした。また、かつての青年団が中心となっていた時代は担い手間の認識に多様性があったが、青年会・同好会体制への移行により長期的に関わる担い手が増加した結果、現在は伝承が極度に統一化されていることを明らかにした。この変容には、第7章で論じた神宮への崇敬の意識の形成や、近隣の梯子獅子伝承地との交流が影響していた。

第9章・第10章では、第二の課題である上演のための梯子を含む構築物について考察を行なった。

第9章では、日本の複数の伝承地において、担い手の梯子の扱い方や認識を検討し、梯子獅子における梯子の機能と信仰面での意義を明らかにした。検討の結果、梯子は天上と地上を結ぶ境界の役割を有する装置として、その神聖性ゆえに塩を撒く、御幣や榊を梯子や櫓の上部に取り付ける、女性の接近を禁じる、産穢を避けるなどの習俗が確認された。

第10章では、梯子を支えるために作られる構築物である「櫓」の信仰的意義を検討した。愛知県、和歌山県、徳島県の伝承地における櫓の形状と装飾を比較検討したうえで、特に朝倉の梯子獅子の担い手たちの櫓の取扱い方法や禁忌を中心に詳細に検証した。その結果、組み立て前の柱・梯子を跨ぐ

ことの禁止、女性や妊婦の櫓への接近の禁止、櫓内部への侵入の禁止、中央の柱への御札と榊の取り付けなどの習俗が確認され、櫓が神聖性を帯びた儀礼空間として扱われていることを指摘した。

以上の考察・検討を通じて、次の点が明らかとなった。

第一に、朝倉の梯子獅子の変容を多角的に考察した結果、朝倉の梯子獅子の変容は、以下の三つの連鎖による変容として理解できる。

- ①社会的変化（生業の変化、都市化、民俗芸能の外部からの注目）
- ②制度的変化（祭日変更、文化財指定、担い手組織の再編）
- ③認識の変化（伝承の統一・固定化、信仰意識の変容）

これらの変容は一方通行ではなく、相互に関連・影響し合いながら進行した。たとえば、養蚕業の興隆は祭日変更をもたらし、その祭日変更は、数十年の時を経て、梯子獅子の意味解釈の変化を促した。これらは、時代の変化に応じた柔軟な適応であり、「変わり続けることで続いてきた」と評価できる。

第二に、伝承組織と「個」の関係について、組織内部には集団として統一された面と、個々人で異なる面が併存していることを明らかにした。特に、組織形態の変容（青年団→青年会・同好会）により、かつては多様であった認識が、組織の再編後は極度に統一化された。

第三に、梯子・ヤグラは単なる道具ではなく、信仰的意義を持つ上演のための構築物であることを、担い手の実践から明らかにした。こうした棧敷論・ヤグラ論に関する研究は、折口信夫以来、複数の研究者により行なわれてきたが、従来は能・歌舞伎など限られた伝統芸能を対象にした研究が主であり、民俗芸能の上演空間については十分に検討されてこなかった。本研究の考察は、折口以来、議論が行なわれてきた棧敷論・ヤグラ論の研究を新たな視点から再考した研究であり、民俗芸能研究における空間論の深化に寄与するものである。

Results of the Doctoral Thesis Defense

博士論文審査結果

Name in Full

氏 名 牧野 由佳

T i t l e

論文題目 梯子獅子の民俗学的研究
—愛知県知多・朝倉の梯子獅子の変容に注目して—

牧野由佳氏の学位論文「梯子獅子の民俗学的研究 —愛知県知多・朝倉の梯子獅子の変容に注目して—」は、民俗芸能の伝承の変容の実態とその特質について、「獅子（虎）に扮した演者が梯子に登り、高所で獅子舞を演じる民俗芸能」である「梯子獅子」を題材として明らかにするとともに、梯子獅子の舞台装置である梯子や櫓の「信仰的意義」を解き明かすことを目的としたものである。牧野氏は梯子獅子の分布について全国的な調査を実施し、その特質を明らかにしたうえで、おもに、愛知県知多市朝倉集落の牟山神社に奉納される梯子獅子の分析から、本論文の目的に迫っている。

本論文の最大の方法的特徴は、10年以上にわたるフィールドワークで培われた梯子獅子の担い手との信頼関係をもとにした語りや、現地でしか得られない文献資料を課題設定の源泉とし、分析の素材としている点にある。きわめて緻密な調査データは、それだけでも民俗誌的に高い価値を有すると評価できる。

本論文は、大きく分けて3つのパートから構成される。すなわち、全国の梯子獅子伝承地を明らかにし、その分布の特徴や地域ごとの舞台装置の特質を明らかにした第一章～第二章、伝承組織と個の関係性の動態について朝倉集落の梯子獅子の分析から明らかにした第三章～第八章、梯子獅子の舞台装置の信仰的意義を全国的な事例から明らかにした第九章～第十章である。

まず、第一のパートでは、これまで全容が不明であった梯子獅子の全国的な分布状況を明らかにし、「三陸沿岸部エリア」「房総エリア」「尾張・知多エリア」「環淡路島エリア」の4つの分布圏を設定している。そのうえで、個々の分布圏の梯子獅子および舞台装置の特徴を導き出し、同じ分布圏に属する梯子獅子の共通性や、分布圏間の伝播の可能性が示される。こうした比較に基づく研究は、牧野氏が梯子獅子の全国分布を把握し、現地に赴いて調査をすることではじめて可能となったものであり、従来の梯子獅子研究の水準を大きく超えた成果である。

つぎに、第二のパートでは、近代以降の朝倉の梯子獅子の変容の様相とその要因が明らかにされる。具体的には、梯子獅子を担う青年組織の変化やそれにともなう担い手や伝承のあり方の変化、新たな起源伝承の生成と固定およびその過程における文字メディアの影響、地域生業の変容にともなう祭日の変化、伊勢神宮の遷宮奉祝行事での梯子獅子の奉納による祭神に関する認識の変化が取りあげられ、「社会的変化」「制度的変化」「認識の変化」という3つの要素が相互に関連することで梯子獅子の変容が進行するという結論に達している。このような変化およびその要因への着目は、多くの芸能が消滅の危機に瀕している現在、その保護の指針を策定するうえで大きな貢献をし得ると期待される。

さらに、このパートでは梯子獅子が奉納される牟山神社の祭神が、新たに女性神と認識されるようになる過程に注目する。本論文では、女性にかかわるケガレ意識の希薄化にともない、女性を避

ける新たな動機付けとして、伊勢神宮との関係を背景とした女性神を祭神とする考えが生成されたと分析するが、祭神の変更を含む多様な変容を「伝統の創造」ではなく「時代の変化に応じた柔軟な適応」と捉えるところに牧野氏の分析のオリジナリティを認めることができる。

こうした梯子獅子の変容に関する研究の独自性は、「担い手組織内部の多様な担い手」に注目する点にある。突出した技能や熱意を有する「キーパーソン」に焦点を当ててきた従来の研究に対し、本論文では様々な立場や意識で梯子獅子にかかわる担い手、元担い手を対象とした聞き取り調査を実施することで、朝倉の梯子獅子の伝承について、その変容の実態と特質を多角的、通時的にとらえることに成功しているのである。

最後に、第三のパートでは、梯子獅子の舞台装置としての梯子や櫓の儀礼的な意義が検討され、梯子や櫓が単なる移動手段や舞台装置ではなく、信仰と関わる神聖性を帯びた装置であることが明らかにされた。とくに櫓は能舞台や歌舞伎小屋の形成論において古くから注目されてきたが、こうした議論を民俗芸能の上演空間にまで広げたことに本論文の価値が認められる。なお、梯子や櫓の神聖性を各地の事例にもとづいて明らかにするこのような研究が、本論文の第一のパートで示された梯子獅子の全国的な把握によって初めて可能となったことについて、その重要性をあらためて指摘しておきたい。

以上のように、本論文は長年にわたる丹念なフィールドワークで得られたデータをもとに梯子獅子という民俗芸能の変容の実態とその特質を明らかにするとともに、梯子や櫓といった舞台装置の信仰的意義を示した優れた研究である。ただし、今後、本論文の研究をさらに発展させるための課題も指摘することができる。たとえば、獅子舞という芸能そのものについては、その芸態や獅子頭の形態、あるいは囃子の分析や比較等、今後さらに具体的な検討を加えることができよう。また、精緻に描き出した朝倉の梯子獅子の事例をより大きな学問的課題と結びつける視点も必要となる。芸能の場における女性の忌避や梯子や棧敷の有する意義、芸能の伝播と宗教者との関係等、さらに掘り下げることのできるテーマが本論文には散見される。これらを研究の種と考えれば、本論文の発展の可能性は大きいと期待される。

以上の理由により、審査委員会は、本論文が学位の授与に値すると判断した。